

鹿児島における性意識や性役割に関する調査研究

第1報 児童生徒における性役割意識について

西種子田 弘芳*・内山 弘訓**

(1998年10月15日 受理)

A Study on Sexuality and Gender in Kagosima
(Report 1) On Sexuality Consciousness and Gender in Children

Hiroyoshi NISHITANEDA*, Hironori UTIYAMA**

I はじめに

戦後の日本人の価値体系の急激な変化のうち、「婚姻」と「性」に関係する事柄が最も変化したように思える。結婚しないで同居するとか、結婚が個人の意志を尊重した自由恋愛の結果であるとか、結婚しても姓は別にする、あるいは離婚も急激に増加しその後再婚してできる新しい複合的な血縁のない家族構成等多くの新しい変化した実態がある。

また、著者の西種子田らが調査報告した全国8地区9大学の大学生の性行動や性意識の調査でも、その性開放と自由化は戦前のそれと極端に変化していることが理解できる。特に80年代になっての若い女性の開放的、積極的な性意識や性行動などの変化は顕著であり、性交意識や性交経験率でも男女間に大きな差異を認めなくなってきている。これらの変化の背景には産業構造の変化に伴う社会生活の変化、特に女性の就業による社会進出と地位の向上、権利意識の高揚とその普及、情報産業の発達、医科学の発達による感染症などからの解放と避妊技術の発展、家族構成の変化など多くの要因が関連している。とりわけ基本的人権の確立と男女平等思想による男女の人間関係の変化が重要な鍵となっている。

ところで、性行動はあくまでも個人の問題であるので、個人の生き方を他のものがとやかく言うことはできない。しかし性に対する意識や態度は、その生活する社会全体のルールや原則と深く関係している。日本の子供の性意識や性行動も個人的な問題でありながら、現在の日本の大人の性意識や性文化に影響されているといえる。また、意識がそのまま行動として表現されるわけではない。これから追及する性役割と性行動が直接的な極めて相関の高い関係があるということも明確でない。

*鹿児島大学教育学部

**鹿児島女子短期大学

ただこれまで述べたように、特に、1980年代以降の性状況がこれまでと極端に異なってきているという実態から、先ずは研究を進めていきたいと考えている。

これまで人間は男女の性によって能力や特性に差異があると前提し、そのことを基盤にして、男女の社会的・家庭的な役割は分業化され、子供達も「男は男らしく、女は女らしく」育つことが期待され、その結果、男女の役割構造は基本的に「男は外に出て仕事、女は家で家事や育児」といった性別役割が築かれていた。

1946年に施行された日本国憲法第24条の「家庭生活における両性の本質的平等規定」を受けて、1948年の現行民法では、それまでの性差別的規定を改正し、少なくとも表面上の性差別は存在しなくなったといえる。また、日本でも漸く男女平等雇用機会均等法の制定をみ、男女平等が社会的にも認められはじめた1980年代後半以降に生まれた子供達を含めた「性」の状況は、こうした旧来の男女の基本的人間関係をも大きく変化させ、質的に異なるものを産み出していく過度期であり、その実態把握は極めて重要であるものと考ええる。

我々は現代性教育の方向を、「生命の尊さに気づき、他人を思いやる心や望ましい人間関係や異性関係を確立するための、判断力や実践力を育てる」と把握している。このような観点にたつて、性教育の実践のための内容や指導方法を確立していくためにも、子供や大人及びその地域の生活文化などの性に関するあらゆる実態の中から適切妥当なものを精選し、具体的な教育対象に適した教材化を進める必要がある。

そこで本研究において、まず鹿児島県の小学校・中学校・高等学校・大学の児童生徒学生らの、男女の在り方、平等観、性差や性役割などについての実態とそれらの相互関係を明らかにすること、次いで年代や地域などの比較によって、性に関わる人間関係の一定の将来方向に見通しを立てること、それに基づいて地域や教育現場に根ざした性教育プログラムを検討するための基本的資料を得ることを目的としている。

報告は、第1報で児童生徒の実態を男女別及び地域別に比較検討し、第2報で高校生や大学生など青年期の実態を検討し報告する。

II 調査研究法

1. 調査地区及び調査対象（第1報について）

日本のなかでの鹿児島県の状況は、南に開かれた、多くの離島を抱え、農産物の生産地として把握されることを考慮し、県北部の中堅S都市、県南部の郡部SB町及び離島のY町の小中学校の児童生徒を対象に実施した。もちろん鹿児島県は離島僻地が多いために、学校規模も小規模学校が多い。そのためにその対象地区の教師に協力を頂き、複数学校に調査を依頼し、実施した。回収後のデータ有効対象者は以下のとおりである。

表1-1 対象者

単位 人

	小学校S地区	小学校SB地区	小学校Y地区	中学校S地区	中学校SB地区	中学校Y地区	合計
男子	133	44	117	52	35	51	432
女子	135	42	91	52	35	50	405
合計	268	86	208	104	70	101	837

なお、比較分析上、地区割を以下のように区分した。

表1-2 対象者

単位 人

	本土S地区	本土SB地区	離島Y地区	本土S地区	本土SB地区	離島Y地区	合計
男子	133	44	117	52	35	51	432
女子	135	42	91	52	35	50	405
合計	本土小学校	354	208	本土中学校	174	101	837

2. 調査内容

調査内容としては、基礎的な社会暦、現代や将来の社会の中での平等感や男女平等感、男女の特異な特性、役割感や将来の希望、自己の性に対する容認性、父母の職業や家庭内での協力関係、「らしさ」の特性などについてである。

3. 調査方法・期間及び分析方法

上記内容を配した質問紙を作成し、調査協力員及び調査対象学校の教師に平成8年9月から12月の期間に、集合調査を実施していただいた。なお、回答は無記名とし、学校別・男女別・地域別に比較検討した。関連性の検討にはカイ2乗検定及びT検定を行った。

なお、結果と考察は主として、本土と離島の小中学校別を基本としながら（地域別校種別）、必要に応じて校種別男女別や地域別男女別に区分して検討することとした。

III 調査結果と考察

1. 家族関係

(1) きょうだい数や居住など

日本では、家族制度は核家族化し、少子化が進行している。特に1世帯当の子供の数は再生産が可能なら2人を切っている。しかし、今回の調査では3人きょうだいが最も多く、全体の45ないし47%を示す。しかし、本土と離島を比較すると、2人以下は本土の小学校で40.8%、離島の小学校では22.7%、また、中学校ではそれぞれ37.4%と23.8%であり、離島の1世帯当のきょうだい数が有意に多い。

また、親との居住関係をみると、両親と同居すると回答した割合は本土の小学校が86.4%、中学校が90.8%である。離島では小中学校とも83.2%である。また、母親と同居する率は、本土では小

学校5.4%, 中学校4.6%であり, 離島ではそれぞれ9.6%と8.9%であることから, わずかに離島が両親と同居する率が低い。その原因については, 今回の調査結果からは掴めえないが, 離婚や離島のために単身赴任や出稼ぎなどの問題などが考えられる。

きょうだいの数の多少は, 競争や協力などのきょうだい間や親と子の保護や干渉といった家族関係をより複雑にすることから, 人間関係の一つである異性感にも微妙に影響することがあると考える。

(2) 親の職業と就業時間など

表2-1と表2-2に父母の職業を, 表3-1と表3-2に就業時間帯について地域別校種別の結果をまとめた。なお, 有意差はこれ以降, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$ と表示した。

父の職業で大きく異なるのは, 本土と離島における会社員と農漁業への従事者との関係である。本土に会社員が多く離島に農漁業への従事者が多い。また離島のほうが, 本調査では区分できない職業に従事する人が多く, また, 両地区とも中学校に比較的多くなっている。

母の職業は年代的には差は見られないが, 本土では, 父の職業と同じく会社員として働く母親が多い。離島では父と一緒に農漁業に従事したり, その他の仕事に関わっていると判断している。

親の就業時間については朝から夕方にかけての, いわゆる一般的な労働時間帯で働く人が7ないし8割を占めているが, 夜から朝(いわゆる深夜業務あるいはこどもが眠っていて夜遅くに帰宅しているのを確認できない状態など)にかけての仕事が2ないし3%みられる。また, 本土の小学校では父も母もその他の時間帯で働くかと判断している。また, 母がその他の時間帯で働く率が中学校よりも小学校で高く, しかも離島の小学校でも16%強あることは, 正規の職業や労働時間帯として認めえない職種や夜活動型人間の増加などが予想され, 注目すべき事柄である。今後, 職業内容や就業時間等についてももう少し細分した調査が必要と思われる。

表2-1 父の職業の地域別校種別比較

	会社員	自営業	農漁業	公務員	専業主夫	バイト	その他
本土小学校	209 (68.0)	47 (14.7)	13 (4.1)	21 (6.6)	0 (0)	0 (0)	21 (6.6)
本土中学校	100 (64.1)	23 (14.7)	6 (3.8)	7 (4.5)	0 (0)	1 (0.6)	19 (12.3)
離島小学校	73 (40.6)	37 (20.6)	19 (10.6)	29 (16.1)	0 (0)	0 (0)	22 (12.2)
離島中学校	25 (26.9)	16 (17.2)	19 (20.4)	14 (15.1)	0 (0)	0 (0)	19 (20.4)

本土 ** 離島 小学校 ** 中学校

表2-2 母の職業の地域別校種別比較

	会社員	自営業	農漁業	公務員	専業主婦	バイト	その他
本土小学校	98 (35.6)	35 (12.7)	5 (1.8)	20 (7.3)	39 (14.2)	33 (12.0)	45 (16.4)
本土中学校	74 (48.7)	17 (11.2)	3 (2.0)	4 (2.6)	17 (11.2)	19 (12.5)	18 (11.8)
離島小学校	24 (14.0)	33 (19.2)	15 (8.7)	17 (9.9)	24 (14.0)	21 (12.2)	38 (22.0)
離島中学校	13 (13.5)	13 (13.5)	13 (13.5)	3 (3.1)	20 (20.9)	13 (13.5)	21 (22.0)

本土 ** 離島

表3-1 父の就業時間の地域別校種別比較

	朝から夕方	昼から夜	夜から朝	その他
本土小学校	237 (73.4)	14 (4.3)	10 (3.1)	62 (19.2)
本土中学校	141 (84.4)	4 (2.4)	4 (2.4)	18 (10.8)
離島小学校	153 (81.4)	14 (7.4)	2 (1.1)	20 (10.6)
離島中学校	79 (82.3)	6 (6.3)	3 (3.1)	8 (8.3)

本土 ** 離島 小学校 * 中学校

表3-2 母の就業時間の地域別校種別比較

	朝から夕方	昼から夜	夜から朝	その他
本土小学校	182 (71.4)	11 (4.3)	8 (3.1)	54 (21.2)
本土中学校	117 (81.3)	9 (6.8)	3 (2.0)	15 (10.4)
離島小学校	120 (71.4)	16 (9.5)	4 (2.4)	28 (16.7)
離島中学校	62 (79.5)	6 (7.7)	2 (2.6)	8 (10.2)

小学校 ** 中学校

③ 家計の収入やその取り扱いなど

家計を支えるお金の稼ぎについては、特に大きな差は見られない。ただ、父が主な収入者であると回答した中学生が、本土では17.3%であるのに対し、離島の中学生は27.7%と多い（5%水準で有意差あり）。しかし、6割から7割が夫婦の共働きによる稼ぎと回答している。特に本土中学校男子は77%の者が共稼ぎとしている。現在の女性の就業率や生活状況あるいは教育状況等を考えると当然な事と考えられる。

家計に必要な収入されたお金の所有については、小学校では男子で母が44.8%、父と母が34.3%であり、女子では母が53.4%、父と母が33.0%と回答している。ところが中学校になると、男女とも62%程度に母が所有するとしている。本土と離島の比較でも同じ状況である。家計簿は母親が管理し、その用途の大部分に母親の役割が期待されている。

次に、家の中で大事な事柄を決定しなければならない時に、特に誰が決定権をもつのかという質問では、表4に示したように校種別男女別の比較において、有意な差が認められた。小学校も中学校も父と母が話し合いをしながら決定することが最も多いが、2番目の位置に父または母のどちらかとする率が小学校より中学校で高い。特に、離島の中学校では男女とも父の決定が大きいとしている。産業構造上からすると、第一次産業では自然を相手に多数の男の筋力が必要であることと考えると、この回答結果はうなづけないこともない。

表4 家で大事な事柄の決定権者の校種別男女別比較

	父	母	父と母	その他
小学校男子	71 (25.1)	58 (20.5)	133 (47.0)	21 (7.4)
小学校女子	55 (20.9)	37 (14.1)	153 (58.2)	18 (6.8)
中学校男子	54 (40.0)	26 (19.3)	44 (32.6)	11 (8.1)
中学校女子	44 (32.6)	23 (17.0)	62 (46.0)	6 (4.4)

男子 ** 女子 小学校 ** 中学校

2. 男女の性差や役割

(1) 社会の中での男女平等感

社会の中で男女が仲よく、男女の特性をよく理解し、協力していくことは大事なことで、現在では当然のことと考える。ところが「あなたは社会の中で男女はまったく平等であるべきですか」の質問に、「平等であるべきだ」と回答した者は全体の48.7%であり、「そう思わない」者も7.3%もなり、残りの43.6%の者は「分からない」と応えていることはまことに意外なことであった。確かに外見的な男女の差は、いわゆる生物的な差としての性差であるが、このことと社会的な価値付けとしての差が明確に区別できにくいための判断結果なのか、ここでは理解しがたい。とりあえず結果としては、半数以上が平等であるべきだとし、小学校と中学校では5%の危険率で中学校の生徒が男女平等を肯定する割合が高い。しかし、総数は少ないが、「男女が平等ではない」と回答した者（小学校41人、中学校24人）のうち、どちらが上位に位置するかと聞くと、小学校では男子は圧倒的に94%の者が「男が女より上であるべきだ」としている。女子では8対6で「女が男より上」と応え、自分の性の優位性を主張している。ところが中学校では男女とも8対4で「女より男が上」と応えており、年令とともに今の現実的な状況を肯定してしまうといえるかもしれない。

次に現実として「社会の中に男女差別があると思いますか」の質問に対する回答は表5-1のような結果であった。さらに校種別男女別に比較したものが表5-2である。

全体的に男子と女子で有意な差を認め、また地区差も認められる。特に表5-2に示されたように、小学校及び中学校で男子よりも女子が、社会の中での男女差別があると感じていることが理解できる。そのことが「これからの社会では、男女差別があると思いますか」の質問に、「今より非常に多くなる」は7%以下であり、「多くなる」と選択した子供は、20%前後である。「今と変わらない」と回答した者は35~40%で最も多く、「少なくなる」は男女とも小学校よりも中学校で、また、男子よりも女子で高い選択率である。また、離島では本土に比較し「少なくなる」を選択した者の割合が多く、特に中学校では男子39.2%、女子では48.0%の者が同意していることから、男女の対等な関係への期待が込められているようである。

表5-1 社会の中での男女差別の存在

性別	地区別	校種別	非常にある	割合多い	ふつう	割合少ない	全くない
男	本土	小学校	16	35	82	18	18
			9.5	20.6	48.5	10.7	10.7
		中学校	12	24	38	12	1
	離島		13.8	27.6	43.7	13.8	1.1
		小学校	5	30	52	22	8
			4.3	25.7	44.4	18.8	6.8
女	本土	中学校	2	12	20	12	4
			4.0	24.0	40.0	24.0	8.0
		小学校	13	52	84	16	7
	離島	*	7.6	30.2	48.8	9.3	4.1
		中学校	6	45	32	3	1
			6.9	51.7	36.9	3.4	1.1
離島	小学校	1	33	48	5	3	
	*	1.1	36.7	53.3	5.6	3.3	
	中学校	2	18	25	5	0	
	4.0	36.0	50.0	10.0	0.0		

本土 ** 離島 小学校 * 中学校 男子 ** 女子

表5-2 社会の中での男女差別の存在

	非常にある	割合多い	ふつう	割合少ない	全くない
小学校男子	21 (7.8)	65 (22.7)	134 (46.9)	40 (14.0)	26 (9.1)
小学校女子	14 (5.4)	85 (32.4)	132 (50.4)	21 (8.0)	10 (3.8)
中学校男子	14 (10.3)	36 (26.3)	58 (42.3)	24 (17.5)	5 (3.6)
中学校女子	8 (5.8)	63 (46.0)	57 (41.5)	8 (5.8)	1 (0.7)

(2) 男女の特性

異性と最も違う特性は何かの回答を、男子を表6-1に女子を表6-2に示した。

男女とも「出産」という生物学的に基本的な性差を第1位にあげているが、女子のほうが男子よりも選択率は5~20%も高い。また、女子では第2位が「身体つき」、ついで「体力」とすべての地域や校種で回答しているが、男子では第2位のランク付けがあいまいになって、「身体つき」「体力」「着物や化粧」「性格」などが男女の特性の違いとしてあげられている。「収入」や「仕事」に特別に性差を感じていないのは、仕事や収入の質は別として、特に女性の仕事への参加や共稼ぎの実情から当たり前の状態として子供達にも把握されてきているものと考えられる。

さらに男女の特性のうち、「体力」「頭のよさ」「我慢強さ」「元気さ」について、男女のどちらが優位かを問いかけた。「体力」や「元気さ」では1%水準で有意に男子が女子よりも体力があるという男女差を認めるが、女子では小学校で「どちらともいえない」と回答する者が25%以上いることは、今回の調査対象が5年生6年生であったことで、女子が体格的に優れている唯一の時期であ

ることが関係していると考えられる。中学校の女子では逆に14～15%に急減することは、筋力の低下が著しいことを認めた結果ともいえる。

「頭の良さ」や「我慢強さ」では小学校で男女差があり、男子は男が、女子は女がそれぞれ優位とする者が20%強であるが、中学校になると何方ともいえないとするものが、圧倒的に多くなり、個性として尊重する意識が次第にできてきたものと考えられる。

表6-1 異性と最も異なる特性の地域別校種別比較-男子 複数回答

	顔(顔つき)	身体つき	性格	体力	仕事	収入	出産	着物や化粧	その他
本土小学校	62(35.0)	70(39.5)	77(43.5)	87(49.2)	22(12.4)	21(11.9)	107(60.5)	71(40.1)	3(1.7)
本土中学校	46(46.0)	62(71.3)	25(28.7)	46(52.9)	25(28.7)	14(14.2)	66(75.9)	45(51.7)	2(1.1)
離島小学校	43(36.8)	52(44.4)	47(40.2)	50(42.7)	21(17.9)	13(11.1)	81(69.2)	56(47.9)	4(3.4)
離島中学校	12(23.5)	27(52.9)	14(27.5)	16(31.4)	6(11.8)	2(3.9)	30(58.8)	12(23.5)	0(0.0)

表6-2 異性と最も異なる特性の地域別校種別比較-女子 複数回答

	顔(顔つき)	身体つき	性格	体力	仕事	収入	出産	着物や化粧	その他
本土小学校	55(31.1)	99(55.9)	54(30.5)	77(43.5)	20(11.3)	31(6.2)	135(76.3)	70(39.5)	5(2.8)
本土中学校	31(35.6)	64(72.4)	20(23.0)	59(67.8)	22(25.3)	9(10.3)	70(80.5)	30(34.5)	2(4.0)
離島小学校	19(20.9)	53(58.2)	28(30.8)	45(49.5)	18(19.8)	13(14.3)	67(73.6)	34(37.4)	5(2.8)
離島中学校	5(10.0)	34(68.0)	8(16.0)	30(60.0)	7(14.0)	4(8.0)	39(78.0)	6(12.0)	1(2.0)

(3) 自己の性の容認と性役割

よく親から「男のくせに」とか「女のくせに」とか言われることについての回答は、「よく言われる」とした者が小学校男子では37～38%で、中学校男子では45%ほどである。ところが女子では離島の小中学校及び本土小学校が男子とほぼ同様の回答率であるのに対し、本土の中学校で70%の者が「女のくせに」と言われ、著しく高い。

また、「くせに」の意味を「軽蔑的に」と「もっとそれらしく」に分けて回答をもとめたところ、男子では、16～22%が「軽蔑的に」であったのに対し、女子では離島の小学校で1例もないし、全体でも15%以下である。男子には男らしくを少しの怒りと激励を込め、女子にはマナーやエチケットとして女性らしくを強調しているように思える。

次に、今の自分の性を認めることを明かにするために、「今の性に生まれたことをどう思うか」を、認めなければ「今度生まれるとしたら、どちらの性が良いか」という質問を与えた。その結果を表7-1から表7-3に示した。

今の自分の性を認める割合は圧倒的に男子が高く、小学校では男子全体の85.4%にものほり、中学校でも70%弱である。男子が「女性でありたかった」という率は1ないし3%である。ただ、なんとなく女性になってみたいと考える者が増加しており、特に中学生に見られる。最近、「男女」とか「女男」とか「性転換願望」などをとりあげるマスコミの報道も多いことから、昔ほど男の女

への変更希望が隠されるべきものではなくなったことなどが影響しているように思える。

一方、女子は小学校では60%弱の者が今の性を認めてはいるものの、20%弱が明確に「男の性でありたい」と希望し、「どちらでも」という少し消極的だが変更を希望する者も20%もいる。中学校の女子も、今の性を認めるものは過半数を割り、小学生ほどははっきりと「男性になりたい」とはいえないが、性の変更を期待している。

地域間では統計的な有意な差は認められないが、離島の中学校男子は「女に生まれる」ことを希望する者は一人もいない。また、本土の小学校男子では90%が男に生まれてよかったとしている。しかし、中学校では特に積極的ではないにしろ女子への希望も見られ、「どちらの性でも」とする者は本土の中学生で36.5%、離島の男子も45.1%と高い。一方女子では、小学校が本土及び離島とも「男に生まれたかった」とする者が中学生よりも多い。離島の中学生の女子は積極的に「男に生まれたかった」とする者は8%と、本土中学生の女子の20%と比較すると低い。しかし、消極的な「どちらの性でも」を加えると、両方とも50%を上回り、今の性への不満は半々ということになる。

次に、「もし生まれ変わった時はどの性を希望するか」について見ると、やはり男子は今の性と同一の性を希望する率が高い。しかし表7-1と表7-2を比較すれば明かになるように今の性とは違う性を希望する率がいずれも高くなっていることが分かる。特に女子では「男になりたい」希望が高く、「どちらの性」でもよいとする消極的な希望とほぼ同じような値で3等分されている。

これらのことから女性が就職し、社会に進出し、女子も外へは可能となったが、その実態は必ずしも女性にとって歓迎すべき変化でないことが分かり、家事や育児の男の協力もそれほど進まず、まだまだ男性優位の考え方や慣行が多いことなどを反映していると推察できる。

表7-1 現在の性の容認の性別地域別校種別比較

性別	地区別	校種別	今の性でよい	違う性がよい	どちらでも
男	本土	小学校	155	2	15
		%	90.1	1.2	8.7
		中学校	60	4	21
	離島	%	70.6	4.7	24.7
		小学校	91	2	23
		%	78.4	1.7	19.9
女	本土	中学校	35	0	23
		%	68.6	0.0	31.4
		小学校	104	32	37
	離島	%	60.1	18.5	21.4
		中学校	40	15	32
		%	46	17.2	36.8
小学校	小学校	51	20	18	
	%	57.3	22.5	21.2	
	中学校	23	4	23	
%	46.0	8.0	46.0		

男子 ** 女子 小学校 ** 中学校

表7-2 今度生まれた場合の性希望の性別地域別校種別比較

性別	地区別	校種別	今の性でよい	違う性がよい	どちらでも
男	本土	小学校	122	14	37
		%	70.5	8.1	21.4
		中学校	43	11	31
	離島	%	50.6	12.9	36.5
		小学校	80	8	27
		%	69.6	7	23.4
女	本土	中学校	25	3	23
		%	49.0	5.9	45.1
		小学校	78	41	55
	離島	%	44.8	23.6	31.6
		中学校	29	33	25
		%	33.3	37.9	28.8
離島	小学校	35	26	27	
	%	39.8	29.5	30.7	
	中学校	14	10	26	
		%	28.0	20.0	52.0

男子 ** 女子 小学校 ** 中学校

表7-3 今度生まれた場合の性希望

	性別校種別	今の性と同一	違う性	どちらでも
**	男小学校	202 (70.1)	22 (7.3)	64 (22.2)
	男中学校	68 (50.0)	14 (10.3)	54 (39.7)
**	女小学校	113 (43.0)	67 (25.5)	83 (31.5)
	女中学校	43 (31.6)	43 (31.6)	50 (36.8)

(4) 結婚や将来の男女の関係

男らしい男の子や女らしい女の子についてのイメージを、子供たちは次のようにあげている。小学校の男の子の男らしさは、明るく元気(56.8%)、スポーツが得意(40.5%)、やさしい(34.4%)自分の考えをもっている(21.4%)であり、以下、頭がよい(8.8%)、清潔(5.4%)と続く。また、男らしくないイメージには、女のような格好をする(63.3%)、おとなしい(21.8%)、よく悩む(17.3%)、女より上になろうとする(17.0%)、おしゃべり(16.0%)などをあげている。一方、小学校の女の子から見た男らしさは、明るく元気(54.9%)、やさしい(50.4%)、スポーツが得意(36.2%)、自分の考えをもっている(29.1%)、清潔(5.6%)、頭がよい(5.6%)が続き、男の子とほぼ同じ傾向である。また、男らしくない男のイメージも女のような格好をする(60.4%)、よく悩む(31.0%)、おとなしい(31.0%)女より上になる(21.3%)と続き、男の子と同じような見方をしている。また、中学生の男女も順位は小学生のイメージとそれほどの違いは見られないが、その他の部分が小学生よりも増加し、その人の特性や個性を重視する傾向がある。今の子供達も明るく元気で、スポーツが得意な、やさしさをもってしかも自分の考えをもった人が男らしいと

している。

一方、女の子の女らしさを小学校の男の子は、やさしい (61.9%)、料理や裁縫等が得意 (47.3%)、清潔 (23.8%)、よく気がつく (15.3%)、頭が良い (10.5%)、髪が長い (9.2%) と続いている。また、女の子のみた女らしさはやさしい (61.9%)、料理や裁縫等が得意 (47.8%)、よく気がつく (31.7%)、清潔 (31.3%)、髪が長い (3.7%) とほぼ男の子と同じイメージを持っている。また、女らしくないイメージも不潔、男のような格好、男より上になる、おしゃべりなどが続き、中学生の男女ともそれほどの違いはない。こうした男は男らしく女は女らしくすることを強調することについて、①すごくそう思う②どちらかというと思う③あまりいいとは思わない④いいとは思わないの評定尺度で質問したところ、小学校及び中学校のいずれも男女間に有意な (1%水準) 差が認められた。小学校では男子が「らしく」することにすごく思うと応えたものは32.5%、どちらかというと思う48.3%、あまりいいとは思わない13.7%、いいとは思わない5.5%であるのに対し、女子ではそれぞれ10.2%、48.5%、34.2%、7.1%である。また、中学校でも全く同じような傾向を示し、男子で28.1%、57.0%、11.9%、3.0%であり、女子では6.7%、52.6%、37.0%、3.7%であった。地域別や校種別に有意な差が認められず男女間だけに差を認めることから、女の子は女らしくすることをあまりにも強調することを嫌う傾向にあるといえる。

次に大人になって「結婚した場合に男と女の役割をどのようにしたいか」の問の結果を表8に示した。

表8 結婚後の男女の役割の在り方

	小学校男子	小学校女子	中学校男子	中学校女子
男女とも働き、家事育児も一緒に	140 (49.1)	135 (50.9)	77 (57.0)	94 (70.1)
子供が生まれたら女子は仕事を辞め、育児に専念	89 (31.2)	54 (27.9)	42 (31.1)	25 (18.7)
結婚したら家事育児に専念	19 (6.7)	19 (7.2)	12 (8.9)	5 (3.7)
男が家事をし、女が外で働く	1 (0.4)	1 (0.4)	0	0
結婚したくない	36 (12.6)	36 (13.6)	4 (3.0)	10 (7.5)

小学校 ** 中学校

小学校の高学年という年齢は身体的発達の急速な時期で、また、自我の形成に伴う精神的発達や感情的起伏も激しい頃である。特に異性に対する興味や関心が急速に芽生えるために、結婚と言う表現に戸惑いが見られるようで、男女とも中学生に比較すると、結婚しないと回答した者が12.6%と13.6%と多く、このことが中学校との間に有意差を生じさせたものと思われる。また、中学校でも女子が10人ほど結婚しないとしており、最近の成人男女の結婚しない現象の一つの兆候とも思われる。しかし、全般的には男女平等の建前を堅持し、男女とも働き、家事育児も一緒にするという家庭を希望しており、特に中学校女子では70%にもものぼっている。しかしまた、全体の30%強の者

が、子どもが生まれたら、女子は仕事を辞め、育児に専念するという親達の時代の夫婦関係も根強く残っているといえよう。

次に男の家事や育児への協力について質問したところ、男ももっと家のことや子どもの世話をしたほうがよいと応えた者は、男子が小学校で26.1%中学校で21.7%であり、女子の18.2%と14.2%を上まわっている。その半面女子では、女と同じ位したらよいと応えた者が多い。女子は男が進んで家事や育児に精だすとは考えていなくて、せいぜい同じ位にと考えているのかもしれない。というのも、あまりしなくてよいや女に任せるが20%前後で男女差がないからである。これからも実生活の父と母の関係からみえる男女の役割感の実態を映しだしていると考えられる。

以上のように、現在の家庭を中心とした性別役割分業は、「男は外で仕事、女は家で家事や育児に専念」というものから、「男も女も仕事、家事や育児は二人で協力して行う」と言うものに観念的には変わりつつが、21世紀までもうわずかという1990年代後半の今日においても、これまでの性別役割構造が残っているといえよう。長い歴史の中で男性は、女性というものがいかに劣等であるか、劣等故に男性の支配を甘受すべきだということ色々と証明しようとしてきた。例えば、女性の脳は男性のものより軽い、女性は男性より体力が劣っている、女性は感情的だから物事を理性的に判断できない、女性は嫉妬深い、社会性に欠ける、わがままであるなど男性は女性に数限りない嘲りの言葉を投げかけてきた。またその一方で、女性はやさしい、我慢強い、従順である、協調性に富む、包容力がある、細かいことによく気がつく、愛情豊かであるなどというふうに取り上げ、その結論として、男性は社会・労働・政治を担い、女性は出産・育児・家事を担うという性別役割分業を生活のすみずみまで徹底させてきたと言える。村瀬幸治氏は以上のようなことを指して「性差の社会的利用という性差別」と呼んでいるが、今回の調査からもこうした歴史の産物が未来を担う子供達に綿々と居座っているように思えてならない。

IV 結 論

鹿児島県の3地域の小中学生男女合計837名に対し、性別役割分業に関する内容項目を含んだ意識調査を実施し、そのデータ分析の結果から以下のような知見を得たことを要約する。

1. 離島と本土では両親の職業が異なり、離島では第1次産業に従事する割合もまだ高いことや、きょうだい数も多い。また、両地区とも共働きが多く、二人の稼ぎで家計を支えている。これらのことが性別役割分業感に少なからず影響していると思われる。
2. 現代社会のなかでの男女差別の存在について30%位が有るとし、特に女子が有意に高い。また、将来少なくなつて欲しいという願望も離島の女子で多い。
3. 男らしさや女らしさの特性としての身体的な特性である元気や体力は男性の特性としているが、頭の良さとか、我慢強いなどについては特に小学校で自己の性の優位を主張している。
4. 自己の性の容認については、男子は圧倒的に男でよかったとしているが、女子は男になりた

かったとする意見も多く、現在の男性優位な社会への批判ともいえる。また、生まれ変わるものなら、どちらの性を希望するかの間に対して、男子も女性になりたいと希望する者が4%あり、どちらでもよいという消極的な希望を含めると18%になる。一方、女子では「男に生まれたい」とする者が13%でどちらでもよいと併せると29%となりかなり高い。

5. 結婚後の男女の役割については、「男女とも働き、家事育児も一緒にする」者は特に離島の中学校女子に多い。しかし、「子どもが生まれたら女は仕事を辞め、家事や育児に専念する」とする者も男女とも30%ほどいる。また、男の家事や育児への協力についても「あまりしなくてよい」とか「女と同じ位に協力する」が極めて高い。
6. これらの総括として理念的には男女差別がなく、男女が社会の対等な構成員として、自らの意志で社会のあらゆる分野の活動に参画する機会が確保され、男女が均等に政治・経済・社会・文化的利益を享受することができる社会が男女共同参画社会として推進されているにもかかわらず、いまだに低い状態であると言わざるをえない。

最後に本調査にご協力いただきました多くの子ども達と先生方に心から感謝申し上げます。

参考引用文献

- (1) 「わが国における大学生の性・エイズに関する調査研究」
第1報 性行動欲求及び性意識・性行動について
学校保健研究 第37巻 第5号
- (2) 「役割・人間・社会」 ジャクソン著 浦野和彦・坂田正顕・関三雄 編集
梓出版 1985年
- (3) 「現代の性差と役割－性別と家族の役割－」 湯沢擁彦・阪井俊郎 編集
培風館 1972年
- (4) 「現代における婦人の地位と役割」 神田道子 著
光成館 1972年
- (5) 「性による [ちがいを] を、性による [差別] に結びつけるもの」 村瀬幸治 著
健康教室 第429集 東山書房 1986年
- (6) 「近代家族の成立と終焉」 上野千鶴子 著
岩波書店 1994年
- (7) 「性差心理学」 津留 浩 編集
朝倉書店 1970年
- (8) 「現代 性教育研究 (思春期問題)」 日本性教育協会 編集
小学館 1983年
- (9) 「現代 性教育研究 (性の比較文化)」 日本性教育協会 編集
小学館 1983年